

センター試験は学校行事!“チーム川和”で 大学受験も部活動も団体戦で全国に挑む

毎号1校ずつの高校にご登場いただき、進路指導の取り組みをご紹介します。

今回はここ5年ほどで飛躍的に進学実績を伸ばし、全国レベルで活躍する部活動も多い神奈川県立川和高校。目指すのは高い次元での文武両道。勉強も部活動も団体戦と、チームワークを武器に戦う活気あふれる高校です。

取材・文／永井ミカ

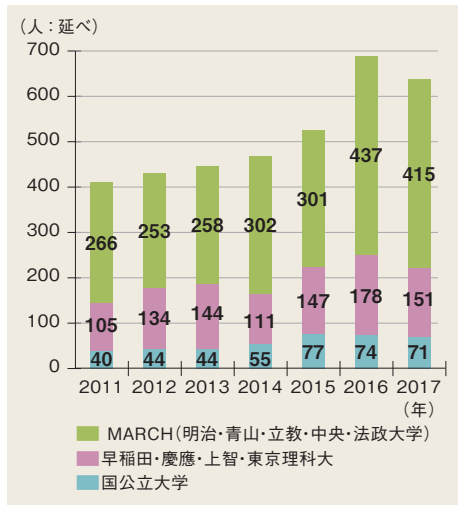
川和高校 (神奈川・県立)

進路支援グループ
学力向上進学重点委員長
総括教諭

榎本一弘先生



図1 現役合格者数の推移(延べ人数、入試年)



文武両道を謳う学校は多いが、神奈川県立川和高校では「高い次元での文武両道」という言葉を使う。「文」では国公立を始めとする難関大学の現役合格を目指し、「武」では全国で戦えるレベルを目指す。しかも、文の生徒と武の生徒がいるのではなく、生徒一人ひとりが一応を追うことを実践している。かつての川和高校は今ほど多くの組織的な取り組みをしていなかった。それでも一定の進路実績は挙げている。伸び伸びとした校風で特に大きな課題もなかったが、9年前に赴任してきた榎本一弘先生は、同時期に異動してきた先生方と進学校としてまだできることがあるはずだと話していたという。「生徒の

伸びしろはもっとある...さらに手をかけていけば生徒の可能性を引き出せるのではないか」
榎本先生は管理グループリーダー、次に教務グループリーダーを経て、2010年度に同校が県の学力向上進学重点校に指定されると、その対策委員長と進路支援グループリーダーを任されることとなった。校内で学習できる環境を整え、小テストや外部模試を有効活用し、文武両道の伝統を活かし「受験は団体戦」と生徒を鼓舞する。進路実績は伸び続け、国公立大学合格者数は4年で倍増、MARCH延べ合格者数は17年度入試で全国2位(「サンデー毎日」17年3月19日号より)となった(図1)。



「部活も勉強もみんなと一緒にがんばる」というのが川和のスタイル。休み時間には学び合う、教え合う姿が自然に生まれている。部活で忙しい生徒たちのすきま時間の活用でもある。



School Data

1962年創立／普通科／生徒数960人(男子416人・女子544人)／進路状況(2017年3月実績) 大学進学294人、短大進学0人、専各進学2人、就職1人、その他61人

図2 3年間の進路指導計画(主なものを抜粋)

	全学年	1・2学年	3学年
4月	第1回校内模試	LHR・学年集会等での進路指導	
5月	前期中間試験		進路説明会(保護者対象)
6月		進路希望調査 教育実習生による講話 進路説明会(保護者対象)	進路希望調査 大学ガイダンス(校内)
7月	第2回校内模試		推薦・AO入試説明会 指定校推薦大学一覧揭示(一部) 保護者面談
8月	夏期講習	インターンシップ(希望者対象) 病院での看護・薬剤師体験	インターンシップ(希望者対象) 横浜国立大学での研究室体験
9月	前期期末試験	第1回選択科目調査	センター試験受験説明会 模擬試験(希望者対象) 指定校推薦校内選考
10月	第3回校内模試(3年生)	保護者面談	推薦入試模擬面接
11月	第3回校内模試(1・2年生)	大学出張授業(2年生) 第2回選択科目調査	
12月	後期中間試験	学年別模試分析会	センター試験受験票配布
1月	第4回校内模試(1・2年生)		特別時間割、アラカルト式補習
2月			
3月	学年末試験		

環境整備

自習室、赤本、模試
進学校としての環境を整える

川和高校に赴任して管理グループリーダーとなった榎本先生は、まず空き教室を自習室に改装した。また、主要大学の赤本をすべて揃えるなど、気付いたことから進学校としての環境を整えていった。

ソフト面では外部模試の受験回数を増やしデータを蓄積。定観測による分析を取り入れた。今では各回の卒業生との比較で受験対策を立てることができるようになった。さらに「進路の若手教員が模

試結果から部活ごとのデータを取り出してみたことがあります。いろいろな活用法があることが浸透してきていると思います」と榎本先生は語る。

小テストの活用

毎授業の小テストを活用し
アクティブなクラスづくり

授業の初めに約10分間の小テストを実施。英語、国語で組織的に行われ、数学では榎本先生が先頭を切って始め、若手を中心に広まっている。

榎本先生の場合、テスト後すぐに隣の席同士で交換をして互いに採点させる。

「さっきまでわからず悩んでいた問題を隣の席の同級生が正解している。するとすぐに『どうやって解いたの?』という会話が始まる。そういう声が聞こえたら模範解答の板書をしばらく待つようにしています。そこに学び合いが生まれるからです」と榎本先生。席替えをすればまた違う相手の採点をする。あるクラスでは自然と「次がんばらうね」「惜しい」などと言メッセージを入れる生徒が増えていった。「そのクラスは一体となって成績も伸びています。メッセージは私も想定外でしたが、そういう点も含めて、わからないところをそのまま放っておくことができない気持ちになるんです。わからないところは質問する、考える、これがアクティブラーニングですし、クラス全体の底上げにつながります」

さらに、小テストの問題づくりは教員が勉強し合うことにもつながった。ペテランと若手が一緒になって良問を探したり、作った小テストを共有したりしている。また難関大学の入試問題から出題し、1年時から高いレベルの問題に触れるよう工夫をしている。

定期テストの共通化

テスト問題作成を通して
授業のレベルアップを図る

英語、数学、国語を中心に定期テスト問題の学年共通化を図っている。「数学の問題を共通化することは難しくありませんが、英語や国語は簡単ではありません」と榎本先生は言う。共通テストを前提に、4月から授業の進め方について各教科で

綿密に打ち合わせをする。「英語では教科書の本文をそのまま出題するのではなく、同レベルの初見の問題を出題します。英語教員は良問を探したり、作家となつて新たな文章を起こします。国語も個人の授業スタイルを超え、全員で授業内容を詰めていきます。共通テストを軸にした切磋琢磨で授業レベルが上がっていくことの効果は絶大。授業の質を上げるための意識が高まり、教員同士の授業見学も日常的に行われています。学習グループを中心に自身の授業をビデオに撮って確認することも勧められています」

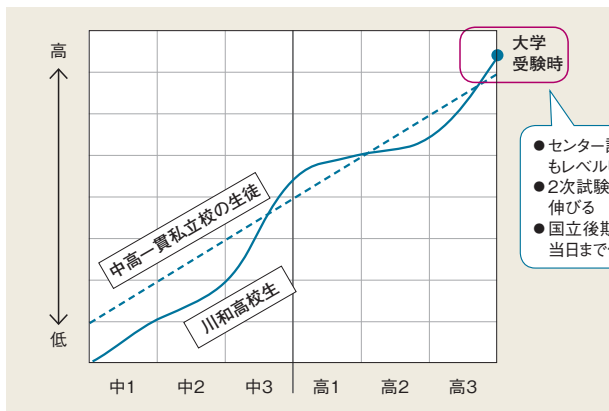
部活動との両立

教室も部活と同じ
チームで底力を上げる

また、共通化することで学年順位も把握でき、模擬テストと同じようにクラスを超えての競争意識が生まれ、部活動の間とも学習面で刺激を与えあっている。

同校では部活動と勉強の高い次元での両立を目指している。運動部、文化部を問わず多くの部活動は朝練、放課後練の他に、昼休みの昼練も取り入れているため、生徒は時間の使い方に長けてくるという。10分休みの時間に昼食をとりながら勉強している様子は同校ではよく見られる光景だ。「平日は帰宅時間が遅く、土日でも遠征などで家庭学習の時間が確保できないことが多い学校です。週末課題は出さず、学校の授業を大切に授業で完結できるようにします。予習や復習は学校にいる間に10分休みなどのすきま時間の有効活用をするよう入学時から指

図3 学習到達進度イメージ説明図(対生徒、保護者)



1・2年生のうちにじわじわと学力アップを図り、受験勉強のスタートダッシュは3年生から。中高一貫校に進学している生徒も多い土地柄、イメージ比較図を作り、生徒や保護者に説明している。

導しています」と榎本先生。小テストはこれに非常に役立っており、授業前の小テスト対策や授業後の見直しで、クラスの仲間と教えあっている生徒が多く見られる。

また、複数の部活動が全国レベルで活躍しているため、生徒が互いに「〇〇部はすごい。〇〇部はがんばっている」と尊敬し合う様子も自然に見られるそうだ。榎本先生は言う。「野球部にすごい投手が一人だけいても勝てない。でもその生徒が打撃練習の投手をしてチームメイトのために時間を使いチームの力が上がれば、より高い次元で戦うことができる。高い次元を経験すれば、その生徒のためにもなる。教室での勉強も同じで、いろいろな学

先輩とのエール交換

先輩の姿を見ることが受験に向けた心の準備に

部活動が盛んな学校らしく、先輩、後輩のつながりは強く、特に指導にきてくれる大学生のOB・OGの助言などは、受験へのモチベーションアップに大いに役立っているそうだ。

そんな同校で12月恒例の「エール交換」。受験間近の3年生が2年生に向けて「1年後の受験生へ」というメッセージを書く。2年生は「受験間近の先輩へ」というメッセージを書く。記名が無記名かは問わず、それを廊下にずらりと貼り出すのだ。「先輩へのいろいろな思いが込められた3年生のメッセージと、部活動でお世話になった先輩への愛情たっぷりの2年生のメッ

力の生徒がいるクラスの中でチーム力を活かし全体の力を上げていく。それが川和の校風に合ったやり方。受験は団体戦と繰り返し生徒に伝えていきます」

オープンキャンパスや入試説明会に部活動で行くことができない生徒が大半。また、6月の体育祭は3年生が中心の縦割りクラス対抗で実施されるので、ここまでは行事にも全力投球だ。そこで、体育祭終了後の3年生の6月後半から7月上旬に大学ガイダンスを実施。東京工業大学、早稲田大学を始め進学希望者の多い大学に直接依頼して今年度は17校の広報担当者に来校してもらう。生徒は複数の大学の説明を受け、最新の情報を得る。部活動も引退し、ここから生徒は本格的な受験モードに入る。

3年1月の登校

センター対策と体育の授業最後まで学校で学ぶ

センター試験前後には1カ月単位で時間割を変更し対策授業を実施。また、体育の時間を減らさないように工夫した。運動部が8割を占める同校においては、体を動かすことによるストレスを発散させる効果があるからだ。そしてまた教室に戻りいつもの仲間と勉強する。センター試験は、推薦で決まった生徒も国立を受験しない生徒も、球技大会や体育祭と同じようにクラスの仲間と一緒に受験する。そうすることで、目標が明確になりクラスが一体となる。生徒に「最後まで学校でみんなで学び続ける」という意識づけをし、結果に結びつけている。

「3年1月の登校率のよいクラスは進学実績がよいということも、私も他の先生方も経験的に感じていました」と榎本先生。そこで、3年1月の登校率向上に意識的に取り組んだ。

セージができあがりです。12月といえば3年生がもっとも不安定な時期なので、先輩へのメッセージを書くことで自分が落ち着く効果もあります」と榎本先生は言う。

さらに、受験対策の補習など3年生向けの連絡事項を2年生も見える場所に掲示。「今、3年生はこんなことをやっている。自分たちももうすぐだ」ということを2年生に意識づけるのが目的だ。自習室で勉強している姿が窓から見えやすい造りになっているのも、同じような効果を期待してのことだ。

川和高校の進路指導のスタンス

学校は安心・安全な場所 みんなで一緒に戦っていく

川和の生徒は入学前から「高校からは団体戦」と言われ続ける。「中学までは同級生もライバルになり得るが、大学受験で戦う相手は全国の高校生。隣の友達を蹴落としても意味がない。それよりもみんなで楽しく学校に来て、みんなでレベルアップしていこう」

小テストや共通の定期テスト、休み時間の学習、自習室での学習、部活内の先輩と後輩の関係…そういうものを通して、生徒たちに「学校は安心・安全な場所」と思ってもらうことを大事にしている。

進学実績が大幅に上昇し、センター試験受験率も100%。しかし、思い切った改革をしたわけではなく、いいと思われることを少しずつ取り入れていった結果だ。「劇薬ではなく漢方薬。何年かかかってじわじわ効いてきました」と榎本先生は言う。他校の実践例などから学び新しい取り組みを導入する時は、ただ真似するのではなく、川和の伝統や校風に合うかどうかをしっかりと吟味している。

個々ががんばっていた生徒たちがみんなで戦うようになった。授業レベル向上のために切磋琢磨するなど、教員も自然と団体で戦う体制になっている。